

ほとんど同県人で同級生にも会いました。お互いに頭張ろうと言つて別れました。本当のダモイが昭和二十三年一月十四日にきました。列車を待つこと一週間。それも最後の暮舎生活で、燃料を集める仕事で、水もなし、雪を解かしての生活が続ぎ、一月下旬にナホトカの第一分所に収容されて、チタと同じく民主教育が主で、使役が若干ありました。分所には第五国守時代の初年兵の藤田君と会つたので、当時の勝武屯陣地の模様を聞き、残つた人たちの消息もわかりました。

あまりにも病弱者が多いので、指導部に交渉して、練成隊をつくり、満州で女学校の校長、木村さんを委員長にして、委員会の運営で、帰国を待つて、五月五日の第一船で明優丸で日本海へ、大部分の人たちが船酔いで大変でした。船内は大した騒ぎもなく、上陸で国の支給品は服と毛布一枚、金参百円でそれぞれの指定列車で故里へ。二度と起こしてならない悲劇、墓標なき戦友を偲んで、ペンをおきます。

敗戦、そして抑留

和歌山県 土井 昇

酷寒で名高いここ北滿チチハルも、八月はさすがに暑い。この世に生を享けて二十五年、夢想だにもしなかつた敗戦の報に、一時はどうなることかと落ちつかぬ日を過ごすこと十数日、やがて武装解除の日が来た。

ここチチハルに集合した関東軍の将兵数万人といわれた。我々が整列した目の前を、胸いっばいの勲章をつけ、意気揚々と闊歩するソ連軍の男女将校。涙が出るほど口惜しい。殺されてもいい、飛びかかってやりたいと思つたのは私一人だけではあるまい。

十月初旬この数方の友軍は千五、六百人くらいに大隊編成され、私も第十一大隊小谷少佐の指揮下に入った。日本軍の団結を考慮したのか、各隊からの混成で見知らぬ人ばかりだ。

「お前たちはこれから故国日本へ帰るのだ」というソ

連軍将校の言葉に、敗戦という悲しみ、故郷へ帰るうれしさの交錯する複雑な気持ちで、軍装準備をした。新品の衣服、寝具等みな故郷の姿を夢みて力いっぱい装備をし、数キロの行軍を駅まで出発した。

途中在チチハルの日本軍人、軍属の主婦が沿道に並び「兵隊さん頑張つて」と涙ながらの見送りを受け、応召当時の見送りと異なった気持ちで万感胸に満ちた。見送った主婦たちは我々がソ連へ抑留されることはすでに知っていたらしい。数キロの行軍だったが、軍装が重すぎるためか、途中落伍する者も数人出る。

日本人婦女がソ連兵に乱暴されたため、日本の遊女等がこれら婦人を守るため、自ら身を投げ出してソ連兵の相手をしたとか、あるいは日本軍人軍属の主婦が集団で自決をしたとか、うわさしきり。

チチハル駅に着けば、すでに停留中の貨物列車に乗せられ、二段仕切りの有蓋貨車に三十人ほど入れられ、扉を閉め、外から鍵をするという牛馬輸送にも似た方法である。

やがて列車が動き出した。北か東か、南か、暗い貨車

の中でみんないろいろと議論したが、方角がわからない。とにかく一夜明けて十一時ごろ、列車が止まった。外から一車両に五人ずつ出よという声がある。車両内では上級になる某曹長が人選して五人が下車する。

久しぶりに見る外の風景、どう見ても南満とは思えない。つい先ほどまで日本へ帰るといふ希望が、失望に変わってゆくのが誰にもわかる一瞬である。下車した兵隊はソ連軍の指示を受け、一緒に運んできた牛を射殺し、これを解体して帰ってきた。

やがて列車が動き出した。だれも話をしない。何時間ほど走ったか……列車がとまり、表の錠の外れる音がして、扉が開けられた。見渡す限りの銀世界。列車の囲いはソ連人が物珍しそうに我々を見つめ、手ぶりで腕時計はないか、万年筆がないかと問いかける。中には黒い大きなパンを見せて交換を持ちかける者もある。言葉が通じなくとも身ぶり素ぶりで結構用が足せるものだ。ソ連抑留中、何十回となく行った物々交換の始まりが、ここが最初である。

ソ連領に入ってから、貨車の施錠はしなくなり、外

の景色も見えた。翌朝まだうす暗いのに、列車がとまり、全員下車せよとの命令が下り、各自、重い自分の持ち物を持って外に整列した。十月中旬というのに、さすがシベリアは寒い。うす暗い中を目をこらすと、そこはだれにでも一見わかる墓地である。十字の墓標が至る所立っている。いよいよここで殺されるのではと、一瞬不吉な予感が背筋を走る。

やがて前後左右をソ連兵に固められて、どこともなく行軍に入った。不安な気持ちで着いた所は、ちよつとした川沿いの工場で、どうやら造船所らしい。

早速二十人単位の作業班をつくらされ、工場内に引き込まれた。鉄道側線の貨車から鉄板をおろせという。幅三メートル長さ六メートル厚さ三センチ一枚数百キロ以上もあるか、百枚以上のものを三時間以内におろせと、金槌子五、六本与えられた。だが、不なれな作業のため、なかなか作業が進まない。ソ連兵のいう半分もできていない。

ふとそばを見ると、木製ながら立派な起重機が数基立っている。起重機を使えば何倍かの作業ができるのに

と腹がたつ。約二倍余りの時間でようやく貨車一両の鉄板おろしが済んだ。翌日からこの鉄板の横持ち作業、各自かけ声一、二、三で持ち上げ、周囲の端を肩にかけ、百メートルほどの工場内へ運搬する。こんな危ない仕事があつた二十日間ほど続いた。

次は石炭おろしだ。夕方、四名一組となつて到着した八十屯積み有蓋貨車の石炭を、夜半までおろせという。扉を開けると崩れ落ちるうちは楽だが、中ほどの分はショベルで二回くらい中継しなければ扉まで届かない。夜半までの作業が朝までたつてもまだ終わらないことしばしばで、空腹の上、寒さと重労働の連続で、多くの戦友が病に倒れた。

唯一の楽しみは、翌日用としてパンが渡される。三口くらいパンを十二に切つて分配する。そばで見ている、これが大きい、これが少ないと苦情がでる。抽せんしていても不服がある。やがて天秤棒をつくつていちいち秤り分ける。それでもパンの囲いが乾いていて、軽く得たというような意見まででる。

翌日分のパンだから、自分の枕もとに布袋に入れてつ

り下げておくが、そのパンが夜のうちに紛失してしまふ。人に食べられるなら今のうちに腹に入れておけば心配ないと、翌日の空腹を心配しながら、ほとんどの人が食べてしまうという悪条件が続く。

人間だ、上官だ、いや親友だといつても、いよいよ食糧がなくなると、犬や猫と変わりない。自分の欲望のおもむくままとなり、ことわざどおり衣食住足りて礼節を知るといふ意味が痛いほどよくわかる。

電灯のない収容所内は暗いので、工場内でゴムやタイヤの破片を拾って明かりをとる。油煙のため朝起きたときみんなの顔が黒くすすけている。

この工場へ来て約半年くらいするとき、この地の状況にくわしい軍属と下士官兵三人が、夜、収容所を脱走して、ソ満国境に逃亡した。夜中、非常呼集がかかり、人員の点検に朝までかかった。

翌日、逃亡した三人がソ連軍用犬に発見され、三人とも射殺され、しかも我々にみせしめのためか、素裸にして収容所鉄条網のよく見える雪の上に転がし、約三か月放置されていた。(八口掌)

話は前後するが、造船所へ来て一か月経過したころ、日本兵の特技者を捜す調べがあった。申告すれば体が楽になる。食糧もよくなる。いや特技のため帰りが遅れる等、うわさの飛び交う中で、私も経験のない木工(大工)だと申告した。しばらくすると、申告をした四、五人の者は木工所へ回された。

大工といつてもごく幼稚で、斧と鋸を持って造船の足場づくりで比較的楽であった。私も「ゼーリン」という年老いたソ連大工について仕事をした。見ず知らずの中であっても、同じ仕事を協同でやり、親分子分ともなれば、ことさら親しみが湧き、ときどき煙草をくれたり可愛がってくれた。

希望も夢もない俘虜の身ながら、生きてゆくためロシア語の一言も覚え、ソ連人の機嫌とりも上手になってきた。当時のソ連の人々の生活も極端に貧しく、わずかの牛乳とジャガ芋で昼食をとっており、我々捕虜の待遇が悪いのもわかるような気がした。

約一年ほど過ぎたころだろうか。いよいよダモイ(帰郷)のうわさが流れ、出発の再編成が始まり、私もその

中に含まれた。造船所を出てゆく前日、ハラシヨール
ポーター（よく仕事をした）ということで、五百四十五
ルーブルの紙幣を支給された。後日、この金はほとんど
パンを買って食べてしまった。

当時の我々には金銭欲も色欲もない。ただ最後の食欲
あるのみ。さあ、今度こそいよいよ待望久しき故郷だと
希望に満ちて出発した。

行き先はチタ中央收容所、多数の日本兵が広々とした
山の中腹の建物に收容され、ほとんど作業はなかつた
が、ダモイ準備と称して共產人民思想の徹底であつた。
連日赤旗の歌を高唱し、反動教育に明け暮れた。

チタの生活は約六か月ほどでたび重なるソ連軍高級將
校（マヨール）の日本帰還を告げられ、チタの町を後
に、シベリア鉄道に揺られること七日七晩、相変わらず
の貨車輸送で、いつ見ても短い牛毛のような草原（ソ
ンドラ地帯）ばかり、ソ連は広い、シベリアは広いの感一
しお、今度こそはと期待にもかかわらず、途中イマンと
いう小さな町で下車を命じられた。

ソ連将校いわく「今ナホトカの港は日本軍で充滿して

いる。輸送が間に合わぬ。ここでしばらく時間待ちだ
が、遊んではおれぬ、しばらく作業をせよらう」。翌日
から早速シヨベルとツルハシを持たされ、移動道路修理
作業が始まった。

トラックに乗せられ、十キロほど行ったらテント暮ら
して、奥地へ奥地へと進む。後で聞くと、この道はソ連
軍用道路であつた由。そういえば山中に戦車隊があつた
り、軍用機が着陸している所も散見された。軍秘に関す
る作業が終了すれば、作業従事者全員が銃殺されるので
はと不安いっぱい毎日である。

道路修理に必要な材木の伐採作業に狩り出され、直径
二メートルにも余る原生林に入り、木を倒し、数メート
ルに切断して一日一人五立方メートルのノルマ、ノルマ
の作業も過酷であつた。ノルマ未達の者は食糧を減ら
す、いわゆる働かざる者食うべからず主義である。

この伐採作業中、切り倒した大木に足を挟まれ大怪我
をした。作業中の戦友が十数人ほど来てくれ、必死で大
木を切断してくれた。その時間の長かつたこと。余り倒
木が大きいで、ここでは動かさず、短く切つて助けてく

れた。足は既に紫色に内出血し、足首はボンボンに腫れ、友の肩に乗って下山したが、医師も薬もない山中、テント内で患部を水で冷やすのみ。以後二か月、友が作業に出ていったテント内でただ一人、痛い足をかばいながら、点々と移動するたびに友の肩を借りる始末。このときばかりは何度自殺を考えたことか。

やがてこのつらい生活も終わるときが来た。完治不能かとまで思っていた左足も、月日という業のお陰で、ビッコを引きながらもどうやら一人歩きができた。いよいよナホトカへ出発という列車に乗り、昭和十八年以來四年ぶりの海を眺め、日本輸送船の姿を見たときは、うれし涙がこみあげ、夢ではないかと疑った。

昭和二十二年十月末、日本では収穫の秋さ中というのに、ここナホトカはもう寒い、広い砂浜一面に張り巡らされた無数のテント。この中で乗船まで、再度の共產主義教育が日本兵の手によって行われた。いまさら批判しても、また反対意見を述べようものなら、お前はまた反動だと言われ、ダモイに影響があるかも知れぬ。「君子危うきに近よらず」……十月二十日、いよいよ乗船、私

はまだ全治していない左足を引きずりながら、それでも、さも何もない風をして、わざと元気そうな足どりでタラップを登った。

船は恵山丸、船腹いっぱい帰還兵を乗せ、ゆっくりと動き出した。二度と再びソ連へ来るものか、シベリア向いて小便もするものか、喜びと怒りの交錯する複雑な気持ちで、二日間の船中の人となった。故郷の父母やいかに、望郷の念一しお、十一月二十一日、懐かしの舞鶴港に上陸した。「国敗れて山河あり」この瞬間ことわざの読み替えを実感したのは私一人ではないだろう。

戦い・捕られ・還った・茨の道

島根県 松浦 進

我々一〇七師団一万三千余人は、昭和二十年早春、満蒙守備のためハルピンを発って五叉溝に移駐を始めたころ「祖国日本危うし」の気配が漂い、ソ満国境も緊張がみなぎり、ついに八月九日、ソ連機甲軍団が大挙来襲